

『宇治拾遺物語』における仏・法(経典・経文)の表現

同志社大学大学院 嶋中佳輝

鎌倉時代成立とされ一九七話を収める『宇治拾遺物語』は一般に世俗説話集と評価されてきた。しかし、先行研究においても『宇治拾遺物語』には仏教説話と見なし得る説話が多く含まれていることが指摘されている。また、世俗説話集であることについて、『日本古典文学全集』のように仏教説話に定義を設けないままに、仏教説話かどうかを一つの尺度として用いている指摘があることも注目される。その一方で、先行研究においても『宇治拾遺物語』に含まれる仏教説話の数は一定しておらず、定義によって五〇〜九〇と大きく幅がある。いづれにせよ、『宇治拾遺物語』は説話総数の四分の一から二分の一弱は仏教説話であると評価されていることになり、仏教説話の位置づけは『宇治拾遺物語』の本質に大きく関わる問題と言える。同時に、仏教説話としての性質をどのように捉えるかという基礎的な部分に揺れがあり、そのためにその位置づけについては解明の余地を残していると言えよう。

本発表では、『宇治拾遺物語』における仏教説話の位置づけという問題に取り組むべく、『宇治拾遺物語』における仏と経典・経文の表現を抽出し、表現が現れる各説話の類話との異同の有無などの表現比較を通して、『宇治拾遺物語』がいかに仏教にこだわっているのか(あるいは、こだわっていないのか)を表現の面から捉えたい。特に、仏については固有名詞であるかどうか、経典・経文については固有名詞や具体的な経文が出る場合の説話内での表現効果を通して、仏・法表現の『宇治拾遺物語』における位置づけを明らかにする。

本発表においては、『宇治拾遺物語』の仏教的な側面を積極的に評価し、それがどのように説話集全体の中で機能しているのかという一端を提示したい。

「融通大念佛桶取之記」と壬生寺の本末関係

同志社大学大学院 八木智生

寛永二十一年(一六四四)、壬生寺(京都市中京区、本尊は延命地藏菩薩)は、律宗寺院として唐招提寺と本末関係を結ぶ。これまで住持は壬生寺内もしくは小槻氏壬生官務家の人物であったが、この時唐招提寺の僧、祐海(一五八七―一六三三)が来寺し、就任した。祐海は壬生寺を唐招提寺の末寺として寺内意識からも位置付けるべく活動する。

その一つが、慶安三年(一六五〇)「融通大念佛桶取之記」(壬生寺所蔵文書。以下、「桶取記」と称する)の作成である。本発表では、この資料を中心に、大念佛と壬生狂言を基底とした、唐招提寺と壬生寺の関係性について考察する。

「桶取記」は、大きく二部構成となっている。まず前半には、円覚十万人導御(一三一一―一二三三)の生涯と彼が融通念佛(大念佛)を弘めたこと、後半は壬生狂言(壬生寺で演じられる民俗芸能。無言であることを芸態上の特色とする)の演目「桶取」の由来と宗教

性について述べられている。

まず「桶取記」において、唐招提寺は導御という人物に象徴され、彼こそが壬生寺の繁栄を導いた人物であることよって、壬生寺の歴史上において唐招提寺が欠かせない存在であることが述べられる。

次に、「桶取記」は壬生狂言の由来を述べる。壬生狂言の演者は壬生寺の近隣住民であった。「桶取記」は、壬生狂言とは導御が発案し、主体となって創始したものであるという。また、「桶取」について、題材となった嫉妬譚と、実際の舞台では演じられない後日譚に相当する靈驗譚を語り、仏教説話的展開を構築する。さらに、導御が演目の作成にも深く関与したという。壬生狂言が大念佛という宗教行事の一環であると再確認するとともに、律僧である導御の重要性が説かれている。

祐海は、壬生寺の中心行事である大念佛によつて、壬生寺と唐招提寺との本末関係を確認し、壬生狂言を律を中心とした宗教的文脈にあらためて位置付けたのである。

## 『菅芥集』所収願文における願主と菅原為長について

日本学術振興会特別研究員 中川 真弓

『続群書類従』第二十八輯上に収載された卷二八二「願文集」は、底本である宮内庁書陵部蔵写本の他に、醍醐寺蔵本および東寺観智院本蔵等が存在し、それらの写本から本来の『菅芥集』という書名が知られる資料である(拙稿『菅芥集』についての基礎的考察)、『詞林』三七、二〇〇五年)。集録される願文は、作者が菅原為長(一一五八―一二四六)に比定され、鎌倉初期の史料として価値を有しているが、『続群書類従』活字本の誤りにより、『群書解題』をはじめとして多くの誤解を生じさせてきた。本発表では、最善本と目される醍醐寺本を主に用い、『菅芥集』所収願文における願主について考察を加える。

醍醐寺本は、醍醐寺第八十代座主の義演准后(一一五八―一六二六)が書写した伝本である。観智院蔵本には、醍醐寺本を親本とする兎円書写本(観智院本a)と、観智院第十二世杲快(一一三四―一七〇八)による書写本(観智院本b)の二つがある。この観智院本bにのみ、末尾に天台座主慈源を願主とする願文一首が見える。調査したところ、観智院聖教内に本願文の一卷が見出された。杲快が父である五条為適の所蔵本を写した際、同作者によるものと見なして加えたものと考えられる。本願文は、慈源の師である良快を追善供養するために執筆されており、両者はいずれも九条家の出身者である。『本朝文集』所収の為長自身による逆修願文に、九条家から受けた恩顧を振り返る部分があることから知られるように、為長は九条家との結びつきが強い。このことから、追加された願文一首も為長の作である可能性が高いと思われる。

各願文には標題が付されており、そこから願主が判明するものもあれば、未だ明らかでないものもある。これらの願文の中には、九条家や鎌倉幕府御家人に関係するものが複数見出せる。本発表では、新たに明らかになった『菅芥集』所収願文の性格とともに、為長の周辺についても考察を加えたい。